

とりもどそう！ 河北潟
泳げる湖、おいしい魚、安心して使える水



通信かほくがた vol.27-3
発行／NPO法人河北潟湖沼研究所
2022年10月30日

CONTENTS

環境展示会エコプロ	1p
河北潟の仲間たち・62 「オオヒョウタンゴミムシ」	2p

セイタカアワダチソウを使った 染めものの製品づくり	3p
活動の中で得たもの	4p
久保川イーハートブ自然再生協議会	6p
活動報告	8p

東京ビックサイトで開催される環境展示会「エコプロ」

エコプロは、1999年より毎年12月に東京ビックサイトで開催されている環境配慮型製品・サービスに関する展示会です。一般社団法人サステナブル経営推進機構と日本経済新聞社が主催されています。河北潟湖沼研究所では、2013年より毎年参加しています。

「七豊米」の活動PRにはじまり、「生きもの元気米」や河北潟の魅力を発信してきました。継続的な出展により、毎年訪ねてきてくださる方もみられるようになりました。2020年は、新型コロナウイルスの影響でオンライン開催となりましたが、2021年は規模を小さくしたかたちで東京ビックサイトで開催されま

した。写真は2021年の様子です。出展ブースも1コマに限られましたが、たくさんの方と交流しました。2019年までと違った点は、小・中学生の参加が目立ち、NPOブースにも多くの生徒さんがグループで訪れたことです。当団体ブースを訪ねてきた生徒さんに聞いてみると、あらかじめ出展者情報を調べて、訪ねるブースを決めてきたそうです。水田で広く使用されている浸透性殺虫剤の問題や、湿地に生息する生物、河北潟の話を聞いていただき色々な質問を受けました。環境や生物に関心のある子どもたちに伝えることができ、こちらも出展した甲斐がありました。

第62回 オオヒョウタンゴミムシ



ゴミムシの仲間は種類が多く、しかもよく似ていて見分けが付きにくいものも多いため、種の同定をするときにいつも苦労します。しかし、オオヒョウタンゴミムシはその大きさと特徴的な姿から、すぐに見分けが付きまします。体色は多くのゴミムシと同様に単純な黒色ですが、ヒョウタンゴミムシの仲間の全般的な特徴である前胸と胴体の間にくびれがあるのと、かなり立派な鋭い大顎を持っているので、区別は容易です。また、ちょっと見た目はクワガタに似ています。他のヒョウタンゴミムシの仲間よりひときわ大きく、体長が50mmを超えるものもいます。

ゴミムシはごみ溜にいる虫という意味ですが、オオヒョウタンゴミムシは海岸の砂浜や河原に生息しています。砂地に穴を掘りそこをすみかとしています。生息地に行くと、独特の足跡が見つかるということですが、実際に探してみると、風紋などいろいろな模様があるので、見分けるのは簡単ではありません。夜行性で夜間調査により見つけやすいとのこと。私は、たまたま捕まえたことは何度かありますが、オオヒョウタンゴミムシを狙って足跡調査や夜間調査をしたときには、何者かに食われたと思われる死体の破片を見つただけで、生きている個体を見つけることはできませんでした。やはり、それほど数は多くないのではないかと思います。

河北潟周辺では、内灘砂丘には一定数が生息しているようです。すずめ野菜をつくっているかほく市の畑でも何度か見かけました。普段から砂丘地で野菜栽培をしているせいか、普通にいる昆虫のイメージがありましたが、石川県では絶滅危惧Ⅱ類、環境省のレッドリストでも準絶滅危惧に選定されています。石川県レッドデータブックによる

と、沿岸部の土地開発、海水浴場の大型重機による整備、道路建設等で生息環境が悪化しているとのこと。河北潟周辺でも、最近までのと里山海道の拡張整備や、現在、大根布放水路の水門の改修工事などが行われていることから、本種の生息状況に影響がないか気になるところです。

石川県では、海浜性の昆虫では、本種の他、イカリモンハンミョウやハラビロハンミョウ、カワラハンミョウなどが絶滅のおそれのある種として取り上げられています。海浜は護岸工事などで人の手が入りやすい場所でもあり、こうした種への注目をもっと広めていくことが必要です。河北潟湖沼研究所では、今年から海岸のごみの調査やごみ拾い活動を始めました。以前より海岸を利用するシギ、チドリなどの渡り鳥や、水生無脊椎動物などを調べていますが、今後は内灘砂丘と内灘～高松海岸の海浜性の昆虫についても注目していきたいと思います。（文 高橋 久）

外来植物のセイタカアワダチソウを使った 染めものの製品づくり

秋に黄色い花を咲かせるセイタカアワダチソウは、北アメリカ原産の外来種で、日本には観賞用、蜜源植物として導入されたことがきっかけとなり、全国にひろまったとされています。河北潟でも、道路沿いや堤防、農地などに広く分布し、ヨシやオギ、ススキ、ヨモギなどの在来種と競合しています。アレロパシー作用があり、地下茎でも増えることから、セイタカアワダチソウしか生えていないような群落も多々見られます。そのため河北潟湖沼研究所では、ヨシやオギの景観を守るために、セイタカアワダチソウを抜き取る活動をおこなってきました。しかし、いらないものとして抜き取るだけでは、取り組みを継続することは難しく、保全にも結びつかないこと、昔の人たちは身近なところにたくさんある植物をうまく利用していたことから、セイタカアワダチソウの活用方法を模索しています。そのひとつがセイタカ

アワダチソウの黄色い花を染料にした染め物です。2012年にこなん水辺公園救援隊の活動において、Tシャツづくりを実施したのが最初です。その後、河北潟自然再生まつりなどで、手染め体験イベントをおこなっており、植生保全に結びつけたプログラムの実施をすすめています。

そして今回、セイタカアワダチソウの花で染めた絹の生地を使い、ハンドバッグを製作することができました。バッグの製作には、県内在住の和のアクセサリー作家である小夜雪輪さんの協力をいただき、オリジナルのがま口バッグに仕上げていただきました。このほかブックカバーやがま口財布の製作もすすめています。染は奥が深く、生地を美しい黄色に染めるために、工夫をかさねていきたいと思います。染め物をはじめてから、セイタカアワダチソウの花が咲き誇る10月が待ち遠しくなりました。（文 川原奈苗）



勉強の場として河北潟湖沼研究所への活動参加をおすすめします。私自身が学生ボランティアの活動の中で得たものを紹介します。

研究所に初めて伺ったのは大学四年の最後の年でした。私は大学で絵を学んでおり、何をどのように描くか、という当たり前のことですがとても大事な課題を持っていました。私が活動の中で得たものとは、体験と知識に基づく風景に対する感じ方や考え方です。それが私にとってどれほど大きな変化になったかという、絵を描くときの基盤であるということです。絵を描くとき、写真のような客観的な対象の写しではなく、そこに自分のメッセージが加わってこそ、絵のモチーフや構図、描写の具合が決まります。

活動に参加してから、研究所が目指す環境に共感していく過程が絵からも辿れます。研究所の活動に刺激を受けて生まれた作品を紹介させていただきます。また作品の紹介を通して、研究所の田んぼの様子も少しですがお伝え出来ればと思います。

これは田んぼを描いた一枚目の作品です。奥に小さくあるのはトラクターで、赤や金など目に鮮やかな色で表した土を耕しています。



初めて河北潟の広大な田んぼの風景を見たとき、そこにある人の営みと自然の大きさに圧倒されました。「これ全部米になるのか」と日本の食を支える米どころ石川の規模のでかさがしみじみと感じられました。また、この規模の稲の栄養となる、太陽、水、土の力強さも感じました。特に肥料をまいて耕して土を作る農家さんの仕事を見ていると、エネルギッシュな土が見渡す限りに広がっている様子を描きたいと思いました。風景に対してトラクターは小さく見え、その愛おしさはおもちゃの様な印象を持ち表現しました。

また、河北潟では田んぼに水を入れる前の土づくりの時期にチュウシャクシギを見ました。私は鳥の種類が分かるほどの知識もないし判別も出来ませんが、この研究所には生き物の専門家がそろっています。田んぼには、ときめきと教材がたくさんあり、教えてくれる専門家がいて、いつの間にか夢中になって鳥の観察を始めていたりします。

一枚目から季節が進み夏。植物の勢いが増すころ、田植えを終えても農家の仕事は忙しく、雑草との戦いの時期です。この頃私は、人と自然の共生をテーマに描きたいと思うようになっていました。研究所の農作業に参加していると農家によっ

て農法や大切にしているこだわりがそれぞれ違ってくるのが見えてきます。特に隣が見える田んぼでは分かりやすく、畦の色や虫や雑草の量に顕著です。産業として収穫の質や効率を追及する田んぼや、田んぼに住む生き物を守るため大変な手間を必要とする田んぼ。それぞれが試行錯誤を重ね作られており、農法の奥深さを知りました。「田んぼに住む生き物を守るため大変な手間を必要とする田んぼ」というのはまさに研究所の田ん



ばですが、昔ながらの知恵や道具を取り入れたり
益虫益鳥などを活かしたりと様々な工夫の中で育
てていました。そんな研究所の田んぼから発想を
得て二作目です。

棚田を切り抜きにして形を強調して描いていま
す。棚田は、山の形にそって作られたもので、自
然と人間とで作られた形に面白さを感じ制作しま
した。除草剤や農薬を使わなくても人間の手で除
草することで稲は青々と育ちます。田んぼはたく
さんの生き物の住処でもあり、多様性が求められる
現代において、手間をかけることで自然と共生
してきた昔ながらの田んぼの文化を見直したいと
思い描きました。

三作目は秋の田んぼです。収穫をむかえる金色
の田んぼは目を凝らすとたくさんの生き物がい
て、環境としても産業としても豊かであることを
表現しています。まさに研究所の田んぼがモデル
になっています。しかし空を飛ぶトキには色が無
く描写にリアリティがありません。それは私がま
だ飛んでいるトキを見ることが出来ていないから
です。また、トキにはニッポニア・ニッポンの学
名があるようで、「日本を象徴する鳥」と呼ばれ
ています。しかし日本産のトキは絶滅しました。



トキだけでなく文化を彩る様々な生物が消えよう
としています。豊かな文化が生物多様性によって
支えられていることを美術界からも真剣に考えた
いと思い描きました。また、現在トキは自然保護
の象徴としても存在感を強め、数を増やしていま
す。トキの姿が見えない現在から過去を想う絵で
あり、未来のトキ舞う田んぼの景色を予感させる
絵でもあります。

以上これまでの活動の中で制作した作品です。
活動に参加するようになって小さな生き物たちが
可愛く感じるようになりました。研究所で得た知
識や経験を通して、ものの感じ方や考え方が大き
く変わりました。これからも農をテーマに作品を
作り続けたいし、そのためにもっと環境について
勉強したいと思います。

研究所にとって私はボランティアというほどの
力になれたかどうか分かりません。一方で私に
とって研究所はアーティストとして成長できた場
所です。短い間でしたが発見が多くとても濃い時
間でした。

最後になりますが、私を受け入れて下さった研
究所の皆様、心より感謝いたします。

河北潟流域自然再生協議会設立に向けて ～久保川イーハートブ自然再生協議会(岩手県一関市)を訪問

河北潟湖沼研究所が参加する河北潟自然再生協議会では、この8月に自然再生推進法に基づく自然再生協議会（以下、法定協議会）を設立することを発意しました。自然再生推進法は、自然再生に関する施策を総合的に推進し、生物の多様性の確保を通じて自然と共生する社会の実現を図り、あわせて地球環境の保全に寄与することを目的に作られた法律です。自然再生を行おうとするもの（NPO、民間団体、地方公共団体、国等）が自然再生事業の実施に主体的に取り組むために、国及び地方団体が実施者に対して必要な協力をするよう努めなければならないことを定めるほか、実施者の責務や必要な措置について定めています。そうした定め1つとして、第8条において、法定協議会について「実施者は、（中略）地域住民、特定非営利活動法人、自然環境に関し専門的知識を有する者、土地の所有者等その他の当該実施者が実施しようとする自然再生事業又はこれに関連する自然再生に関する活動に参加しようとする者並びに関係地方公共団体及び関係行政機関からなる自然再生協議会（以下「協議会」という。）を組織するものとする。」と定められています。つまり、本法律に定められた自然再生事業を実施するためには、住民、NPO、有識者、土地の所有者や関係者ととも自治体と国が参加した自然再生協議会を組織することが求められています。また、協議会の役割として、1) 自然再生全体構想を作成すること、2) 自然再生事業実施計画の案について協議すること、3) 自然再生事業の実施に係る連絡調整を行うことが定められています。

河北潟自然再生協議会は、自然再生推進法が成立する前に結成された自然再生協議会ですので、この法律に基づいた法定協議会ではありません。また、地域住民とNPOから構成されているため、法定協議会の構成要素を満たしていません。これまでも自治体に対してはたびたび参加を促してきましたが、各自治体とも概ねの意見として、自治体は支援する立場であるとの姿勢が示されてきま

した。そして私たちもそのことを尊重してきました。しかし、地域における自然再生を進める上で、自治体や国も住民と同じテーブルにつくことで、大規模な取り組みやきめの細かい取り組みが可能になるはずです。そこで、今回は、自然再生推進法を根拠とした法定協議会をつくることで、多様な参加による河北潟の自然再生を協議するための新たなテーブルとしたいと考えました。また、同時にこれまでの活動を通じて、河北潟の自然環境に関わる問題を解決するためには、河北潟のことだけでなく、河北潟の水を生み出す流域との関係や、海と潟とのつながりに注目することが必要であるということが実感されてきました。さらに、中・上流域の活動団体との交流を進める中で、それぞれが問題を抱えていること、そしてその解決のためには一緒に流域単位での取り組みを考えていくことが重要であるとの認識が深まってきました。そこで、この度の法的協議会の発意にあたり、河北潟と流域及び大野川を加えた協議会とすることとしました。

ところで、法定協議会を設立することの発意は、誰でも行えることになっています。しかし、実際には、現在ある26の法定協議会のうち、国または地方自治体により発意されたものが24であり、これらは行政機関や自治体の機関が事務局となっています。民間から発意され民間が事務局となっている法定協議会は全国に2つだけです。このうちの1つであり、初めて民間からの発意で設立さ





れた中海自然再生協会については、その発意者で事務局でもある認定NPO法人自然再生センターとは以前からのおつきあいがあり、現地も訪問したことがあります。そこで、今回はもう一つの民間発意の法定協議会である久保川イーハトーブ自然再生協議会の取り組みを視察するために、11月8日に岩手県一関市を訪れました。活動について話を聞かせてくださったのは、事務局を務める久保川イーハトーブ自然再生研究所の会長の千坂げんぼうさんです。知勝院というお寺の住職さんでもあります。千坂さんは久保川イーハトーブ自然再生協議会の代表も努めておられます。

最初に訪れたのは、知勝院の敷地内にある久保川イーハトーブ自然再生研究所の建物です。千坂さんが資金援助して建てられたというまだ新しい白壁の立派な建物です。「生きもの浄土館」と名付けられた建屋内には、NPOの事務所とともに、研究のためのスペースや、立派な書架と標本棚が設置されています。在住の研究員のほか、東京大学などの研究者も巻き込み、地域の自然史研究の拠点となっています。当地で研究して論文を書き上げた人も多いとこのことで、特に若い研究者が来やすいよう、無料で宿泊できる施設も整っていました。また一般の人が、滞在型の自然体験ができるログハウスも複数ありました。

千坂さんより、自然再生協議会の設立経緯や、団体の自然再生全体構想等についてお話を伺いました。協議会設立の際は千坂さんが中心となり、設立準備をすすめられたそうです。まずは環境省から話を持っていき、段階的に自然再生について



の経験が少ない地元行政へと話を進めていったとのことでした。自治体のトップなどの実力者に理解を広めると同時に、地元の人や生物や自然に関心のない人にも広く話をして、多様な人たちに参加していただくようにしていったそうです。また、協議会の活動は長い目で見て地域活性化につながるものを目指していることや、活動は科学的知見に基づき進めることを大事にしており、研究者と連携しながら進めており、市民参加を大切にしているのはもちろん、研究者が加わることも大事にされていることを強調されていました。私たちへの具体的なアドバイスとして、具体的なことから実施計画をつくっていくことが良いのではと教えていただきました。

少し離れた場所にある、知勝院が実践している樹木葬の現地も見学させていただきました。ここでも生物多様性と自然再生の視点が注がれていて、管理されていない植林地を墓地として落葉広葉樹に置き換えているとのことでした。一塊の山がまるまる樹木葬の墓地であると同時に、多様性のある里山の姿が再生されつつあることに圧倒されました。

現在は、耕作放棄地の自然再生に一番力を入れているそうで、山を下りると地元のボランティアの方が、放棄された広い水田に大型のバックホーで池をつくっていました。私はその光景を見ながら、その重機のパワーを上回る千坂さんのぶれない信念とパワーが、イーハトーブの自然再生の推進力になっていることを強く感じました。

(文 番匠尚子)

河北潟自然再生まつり

河北潟自然再生まつりは、2021年で開催10年目をむかえました。親子が参加できるプログラムが増え、充実したイベントとなりました。



田んぼや畑の生きものの調査

稲刈り後の水田には赤とんぼが飛んでおり、水溜まりで産卵していました。田んぼに見られる色んな雑草に注目し、形の違う野草を採集して観察しました。砂丘地のすずめ野菜の畑では、畑の益虫である狩蜂が増えることを願って、カットしたヨシの束を取り付けました。



外来植物除去活動

2021年11月13日に、金沢市大場地区の農業排水路にて、11月14日にはかほく市指江地区の農業排水路にて外来植物除去活動がおこなわれました。大勢の方が参加し、大量のチクゴスズメノヒエが水辺から取り除かれました。大場土地改良区さん、荏原商事(株)さん、(株)尾山製作所さん、内日角生産組合さん、指江生産組合さん、北菱電興(株)さん、(株)柿本商会さん、河北潟沿岸土地改良区さん、NPO法人河北潟湖沼研究所のメンバーが参加しました。



河北潟流域ゴミ調査

河北潟流域のどこにゴミが溜まりやすいのか、ゴミだまりやゴミの傾向を把握するために、2021年11月に3日間にわたって、河北潟や流域の河川等をまわりながら、ゴミの状況を調べました。1日めは、河北潟の北部にある宇ノ気水辺公園からスタートし、南のこなん水辺公園までの湖岸を調べていきました。またそれぞれの地点で、水面、岸、陸にわけて10m×10mのゴミの種類と数を記録しました。多い所では2,000個以上のゴミがあるところもありました。お天気が良く、活動中にコハクチョウやミサゴも見られました。2日目は、柳瀬川の下流部沿いに歩きながら、ゴミの調査とゴミ拾いを実施しました。ゴミはペットボトルや缶が多く、食べ物が入っていたプラ袋やカップ、トレイ等も目立ちました。道路脇の水路にもたくさんのポイ捨てゴミがありました。2日目は、津幡川と宇ノ気川の河口から、それぞれ上流方向へ約5kmさかのぼって、ゴミの様子を記録しました。津幡川では河口に近くなるほど、岸にポイ捨てゴミが散乱していました。ペットボトルや缶が多く、橋の下には集中して見られました。水門のあるところでは、水と同時にゴミもせき止められて溜まっていました。宇ノ気川では、農地から風で飛ばされたと思われる肥料袋やマルチの切れ端等、ペットボトルや缶などのゴミがみられましたが、全体的にゴミは少ないようでした。宇ノ気川の橋の下にも、そこで捨てられたようにゴミがまとまってありました。
*この活動の実施にあたり、エフピコ環境基金の助成を受けています。



編集後記

クリーン作戦がおこなわれていなかった、河北潟の南岸には、上の写真のとおり、非常にたくさんのゴミが見られました。あまりの多さにびっくりします。この場所は、水辺が少し沈下し、岸の蛇籠が水に浸かるようになったため、ゴミが溜まりやすくなっています。ゴミを回収しやすい地点でもあります。(N)